

日本分析化学会北海道支部の思い出

齋藤 和雄

私と日本分析化学会北海道支部の係わりは、吉田仁志先生と多賀光彦先生とのご厚誼によっている。1967 年頃だったと思うが、私が所属していた講座に関係のあった鉛取り扱い職場で、鉛取り扱い作業者の健康管理に役立てるために空気中の鉛を測定する必要性が生じ、当時、北大教養部で化学担当の教授だった吉田仁志先生にご協力をお願いした。先生のご指導の下に希硝酸を入れたインピンジャーに空気を捕集し、捕集液中の鉛を測定し、気中の鉛濃度を明らかにして役立てた。鉛中毒は、古くて新しい中毒であるが、その頃はガソリンにアンチノック剤として添加された四アルキル鉛が、エンジンによる燃焼で生じた自動車排気ガス中の無機鉛による大気汚染が公害として取り上げられ、問題となり始めていた。道内の各市町村における空気中鉛の濃度は自動車の交通量や山坂のある地形等と良く相関し、道警のパトロールカーと白バイの乗務員で転勤のない当該市町村に定住している警察官の血液中鉛を測定すると、札幌、小樽、千歳で高く、倶知安等の地方で低かったことを思い出す。

上記の仕事が終わって間もなく吉田先生と多賀先生からお誘いがあり、分析化学会へ入会した。当時、私の分析化学会に対する印象は、よく組織化された、とてもまとまりの良い学会で、とりわけ、北海道支部では著作活動が活発に行われ、支部独自で版權を有する著書が何冊も出版されている。新化学実験（化学同人、1989）には編著者の一人として私も加えて頂いた。また、役員は1年毎に交代して、その都度、学会活動に新風を吹き込み、活性化に貢献していることに感心した。私も昭和55～57年、昭和59年～60年に日本分析化学会常議員を、同59～60年に北海道支部長を仰せつかり、平成3～4年には日本分析化学会理事を務めさせて頂いた。五反田にある日本分析化学会事務局で開催される理事会では、全国の活動状況や学会の企画運営が良く解り、我々の医学関係の学会運営にとっても大変参考になった。また、私が支部長を仰せ付かった時、北海道支部に貢献した支部会員を顕彰する事となり、北海道分析化学賞と北海道分析化学会功労賞を創設した。これに関連して思い出すことは、記念品として何を差上げたら良いかであった。種々検討した結果、メダルを作成し贈呈することとなった。メダルの作成は設計デザインの才能を持っていた大学院博士課程院生の力を借りて”HAC”の文字に真鍮メッキを施した文鎮としても使える円形の重いメダルを完成させた。その第一号は昭和59年、青村和夫先生に授与された。そして、平成10年2月には、私も功労賞の栄に与かり、記念メダルを頂戴した。

北海道支部の多くの年間行事の中で、冬のスキーを兼ねた定山溪青巒荘での冰雪セミナーでは非学会員からの話題提供もよく取り入れられた。雪祭りの期間中に開催される冬の支部大会には全国の学会員が出席できる仕組みになっており、感心した行事の日程であった。また、道立の研究所、日立、島津などの業界の方達も支部役員に加わり、早くから産学協同の絆が培われていたと言える。北海道支部が開催する日本分析化学会の年会には全国から、とりわけ、多くの会員が集い、教養部の教室を会場に研究発表、活発な質疑が行われ、夜の懇親会では夏のサッポロビール園で盛り上がり、会員にとって思い出になる有

意義な学術交流がなされた。

分析化学会を通じて多くの方々と親交を暖めることが出来たことは、私にとってとても幸せなことであった。吉田仁志先生、多賀光彦先生を始め、那須先生ご夫妻、渡辺寛人先生、藤本昌利先生、永山政一先生、古市隆三郎先生、長谷部清先生、田中俊逸先生、吉田登先生、田村紘基先生、高橋英明先生、松永勝彦先生、三浦敏明先生等々、多くの会員の皆様とのご厚誼を頂戴した。支部会、役員会、常議員会、出版編集委員会など種々の会合でのことが思い出される。

日本分析化学会北海道支部が創設 50 周年を向かえた。半世紀に渡る活発な学会活動の持続を心から喜び、これを節目として、更なる学会の発展を祈念して止まない。

(医療法人社団 北海道健診センタークリニック理事長)

(北海道大学名誉教授)